

予測の人 栗原 宜夫

今回は、GFDLで、台風予測モデルなどに精力的に取り組んでいる栗原さんに聞いてみました。

問：何年に卒業されましたか？

—1953年に東大理学部を卒業、気象庁に入りました。

問：どうして、気象庁に入ったのですか？

—卒業した頃は、ひどい不況で就職難でした。気象庁に入った動機はいろいろありますが、なんとといっても、当時の気象台の中には、私をひきつけるものがありました。気象には、もともと興味を持っていましたし、特に、予測という側面には、非常に関心がありました。はじめに測候課に入り、吉武課長、村上係長でした。観測と測器関係の仕事を中心にしていました。湿度計や蒸発計のことを調べたり、ロボット雨量計の露場テストなどしました。仕事が忙しかったが、現象を細かく見るくせができました。当時の測候課は、Academicな雰囲気、進取の気性に富んでいました。そのあと、統計課で5年、斎藤課長、百瀬、落合、菊地原係長のもとで仕事をしました。アジア地区の気候状態を気象要覧に書いたり、雨の統計調査などをしました。雨量分布図を作るのに観測のない所の雨量を地形因子解析の方法を使って決めたりしました。この間の経験から、平均値を見る時、必ず関連した統計量を見る様になりました。こういうことが、後の研究に役立ったように思います。59年、電計が出来る時、気研に移ることができました。室長は、村上さんで、水収支や、エネルギー収支の解析などをやりました。

問：アメリカへ来るきっかけは？

—むつかしいですね。最初、出張で2年、帰って日本に2年いて、67年に来ました。本当の動機は、日本では出来ないが、アメリカでは出来そうな仕事、たとえば、予測の限界をみるようなことをしてみたかったです。当時は、計算機の状況は、日本とアメリカは雲泥の差がありました。日本に居るのなら、日本の研究状況をまず良くしなければならぬ。それをしていたら研究する時間が制限を受ける。さらに、アメリカでは、日本より息の長い研究が出来そうに思えたからで

す。かなり、リスクはありましたが。

問：今までやって来た研究の中でこれと思うものは？

—ハリケーンの研究。良いモデルが出来たと思っています。

問：何故、ハリケーンモデルに向かわれたのですか？

—最初は、大循環に興味があって、統計的・力学的モデルを作ったりしていました。ところが、技術の発達が予想より早く、大循環モデルの長時間積分が出来るようになって、私のつくったモデルの限界が見えてきました。一方で、熱帯の循環の取り扱いをよくしなければと感じていました。その頃、GFDLで普通の大循環モデルではくわしくとり扱えない現象、例えば、ハリケーン、前線などのメソスケール現象の研究にも力を入れることになり、1970年の秋、Smagorinskyとの話し合いでハリケーンをすることにしました。

問：今、気象学の中で、興味を持っていることは？

—やはり、ハリケーンの予測にあります。特に、一般場との相互作用には興味があります。

問：日本の現在の研究状況についてはどうですか？

—最近の研究ハードウェアは豊かだと思います。研究者が一つの問題に打ち込みながら研究感覚をすどくしていければいいですね。気象庁では、研究の経験を積んでもう一仕事という年齢になると、研究から行政に移ってゆくようでおいしいと思います。むつかしいことですが。

問：今後の、気象学の課題は何ですか？

—予報精度の向上（小さいスケールから長いスケールまで）。その意味から云っても、日本では firm-mesh modelを向上させること。そして梅雨や台風、豪雪の研究が盛んになると良いと思います。

問：若い人達に一言。

—気象の研究をする人も、気象現象を観測したり予報したりする人も、仕事を楽しむような取り組み方をしてほしいですね。それから、研究の場合、国内での交流が盛んになればよい。例えば、セミナーなどを活発にすべきだと思いますが。

夕陽の入る、GFDLの一室で、終始物静かに interview に応じて下さった栗原さんでした。その話のはしはしから、予報にかけた情熱がくみとれました。かって、同じ組織に属したのものとしては、理屈抜きに共感出来るものでした。

(住 明正)